

## 前言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 戸部, 健 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/00029783">http://hdl.handle.net/10297/00029783</a>

# 前 言

戸部 健

本誌は、平成27（2015）～29（2017）年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「東アジアの視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学際的研究」（15K01869 研究代表者：戸部 健）が今年度で満期となるに当たり、その研究成果の一部をまとめたものである。

本研究の開始は2014年にさかのぼる。国立大学の地域への貢献が叫ばれるなか、静岡大学に籍を置く筆者（中国近現代史）は、同僚の今村直樹（日本近世近代史、現・熊本大学）・長沼さやか（文化人類学、中国地域研究）を誘い、静岡県を代表する農産品である茶に注目する研究プロジェクトを立ち上げた。三人ともそれまで茶を扱った研究をしたことはほとんどなく、手探りのなかでのスタートであったが、そんな三人にとって強みだと思われたのは、カバーする地域とディシプリンの多様性であった。東アジアの茶業・茶文化研究においては、「日本の茶業」、「中国の茶文化」などのように、特定の国や地域を中心とした考察がしばしば見られる。ただ、それぞれの時代において、東アジア、特に日本の茶業・茶文化が世界からどのように見られていたのか、という問いについては、ユーカーズ『オール・アバウト・ティー』や角山栄『茶の世界史』など先行する業績があるものの、十分に答えられているとは言い難い。また、日本やアジアの茶がどのように生産・再製・流通し、最終的にどのように認識・消費されたか、その総体的な姿についても時代ごとの変化に合わせて解明されなければならない。国境やディシプリンを超えた研究が必要であろう。

そのためにはさらに多くのメンバーが必要となる。そこで、日本近世史、とりわけ静岡地域を中心とした茶業について業績のある岡村龍男（駒澤大学非常勤講師）と、中国近現代経済史を専攻する吉田建一郎（大阪経済大学）を新たに迎えることで戦力を増強しつつ、それを基礎に東アジア茶文化研究会を結成した。そのメンバーで科研費に応募し、2015年に採択されたのが基盤研究（C）「東アジアの視野からとらえた日本の茶と茶文化に関する学際的研究」である。

その後、東アジア茶文化研究会にはイギリス文学を専門とする鈴木実佳（静岡大学）が加わり、さらに地域やディシプリンの幅が広がった。なお、この過程で、科研費のほかに静岡大学人文社会科学部学部長裁量経費（アジア研究）からも補助をいただいている。

プロジェクトの期間は3年と短いものであったが、その間に各人研究を進め、そ

の成果を『アジア研究』（静岡大学）を中心に発表してきた<sup>1)</sup>。それらについては重複にもなるため本誌に掲載しない。ここに載せているのは、2018年2月段階における新たな研究成果である。簡単にその内容について紹介する。

岡村龍男「茶生産者の流通・消費認識と製茶法の変化—横浜開港以前の駿河国を事例に一」は、江戸後期静岡における茶生産者の流通・消費認識のありようを文政茶一件（1824〔文政七〕年）という事件での動きを通して明らかにする。また、1738（元文三）年に永谷宗円が完成させた宇治製法という新しい製茶法の普及についても検討し、幕末以前の駿河国ではそれがまだ一般的でなかったことを実証している。幕領である駿河国には、地域を挙げて宇治製法の導入を推し進めるような主体が存在しなかったことが背景にあったとする。

その宇治製法を早くから導入していたのが熊本藩であった。今村直樹「幕末・明治前期における茶生産の地域的展開—熊本藩（県）域を事例に一」は、1840年代と70年代の熊本藩（県）における茶生産量を比較し、30年余りの間に生産量が大幅に増えていることを明らかにしている。熊本茶は幕末の長崎開港を受けて、海外への輸出が試みられたが、その背景には輸出向けの製茶法の習得を行う篤農家の存在や、茶産業を積極的に推進する熊本藩の姿勢があったとする。

その後、日本茶の海外輸出は静岡茶を中心に隆盛を極めるが、これまでの研究ではアメリカへの輸出状況に関する研究が圧倒的に多かった。戦前において日本茶が最も多く輸入されたのがアメリカだったからというのが主な理由だが、とはいえ、その他の輸出先との関係についても一層研究を進める必要がある。吉田建一郎「戦間期日ソ茶貿易史研究の深化にむけて」は、1920～30年代における日本茶のソ連への輸出について検討している。ただし、日ソ間の茶貿易を見る上で実は中国の存在が重要であることを史料に基づいて提起している点が特徴的である。

ところで、日本茶がソ連に輸出されたきっかけは、中国を拠点とするイギリス系茶貿易商社であるハリソンズ・キング・アンド・アーウィン社が日本とソ連の茶業界を仲介したことだった。このハリソンズ・キング・アンド・アーウィン社は、同時期にアメリカ最大の日本茶輸入業者であったアーウィン・ハリソンズ・アンド・ホイットニー社とともに、イギリスの総合商社であるハリソンズ・アンド・クロスフィールド社のグループ企業であった。戸部健「近代中国における英国系茶貿易商社の動向解明に向けて—ロンドン市文書館所蔵ハリソンズ・キング・アンド・アー

---

<sup>1)</sup> 『アジア研究』（静岡大学）に掲載されたものは以下の通り。戸部健・今村直樹・長沼さやか「アジアおよび静岡の茶と茶文化をめぐる学際的研究」（10号、2015年）。戸部健「アジアおよび静岡の茶と茶文化に関する学問横断的研究」およびMika Suzuki, 'Tea for a Medical Doctor and Man of Letters'（11号、2016年）。戸部健「戦前期北米の東アジア茶専門貿易業者の経営状況—ロンドン市文書館所蔵アーウィン商会関係資料について」（12号、2017年）。

ウィン社関係文書について」は、世界史的視野から中国茶や日本茶を捉える上での、ハリソンズ・キング社の文書の可能性について論じている。アーウィン・ハリソンズ社関係文書について述べた旧稿と合せて読んでいただきたい。

以上は主に茶の生産・流通に関わるものであったが、茶の消費やそれに関わる文化についても解明されるべきである。Mika Suzuki (鈴木実佳), 'Tea and Different Kinds of Sociability' は、18世紀以降のイギリスと日本での喫茶のあり方をジェンダーなどの視点を織り交ぜながら比較している。また、その絵画などでの描かれ方の違いについても、例えばイギリスのカンパセーション・ピース (集団肖像画) と日本の浮世絵などを比べることで明らかにしている。イギリスからの視点を取り入れることで、近世・近代の日本における喫茶文化や茶描写の独自性を読者に気づかせる。

以上が本誌に掲載されている各論考の概要だが、すでに発表されている旧稿と合せて読んでいただくことで、本プロジェクトによる成果の現時点での全体像を知ることができるだろう。ただ、岡村と鈴木を除けば、メンバーの茶研究歴は依然として浅い。そのため、以上の成果はあくまでも研究の通過点であると位置づけられる。今後も個々の研究を深化させつつ、より広い視野で日本茶を捉えられるよう研鑽を続けていきたい。